優しく強い子に！

http://www.minamih.net/
２０・　１・１７（金）
南ＮＥＷＳｎｏ１２２

仲間に会えました

今の家に引っ越した２６年ほど前は，初夏の５月にはカッコウ，カッコウと鳴く声が片倉城跡の方から聴こえてきました。今は聴くことがありません。

片倉城跡の池にはトンボの姿も観られなくなりました。昆虫の種がものすごい速さで絶滅しているそうです。蝉も少なくなりましたね。

でも，１月１６日（木），南招待６年再見大会のカップ代を振り込みに，由井三時代の教え子がいる郵便局に行く途中，セレオの本屋さんに頼んでおいた本を取りに行く途中で，可愛い仲間に出会ったのです。

１６号に抜ける緑町にある教会の前の道を歩いていたらキンカンの木に小鳥を見つけました。メジロです。キンカンの実を啄ばんでいました。

たいていすぐ逃げてしまうのですが，食事に夢中でその姿を撮らせてくれました。

帰り道，南口からトチノキ通りを子安坂上に向かって歩いていると、ナンテンのような赤い実をつけた木に１０羽ほどのヒヨドリの群れ。赤い実を啄ばみながら飛び交っていました。

キンカンの木にメジロ

反対側の歩道を見ると高齢の女性がトチノキの下の花壇の草取り・手入れをしていました。反対側に渡って

「お疲れ様です。きれいですね。有難うございます。

子安３丁目の方ですか？」

と話しかけたら

「子安３丁目の美化部です」

とおっしゃいました。

「鈴木副会長はお元気ですか？」

「鈴木さんは会長です」

「鈴木さんによろしくお伝えください。矢上と申します。お世話になった者です」

鈴木さんは，南の３代目の後援会長で，南のコーチを永年務めてくださった方です。南の方針を大切にして，子どもたちにドリブルとターンを一生懸命教えてくださった方です。ご自身も南壮年部の試合で華麗なドリブルを披露していました。

生きとし生けるもの，花も木も，小鳥も人もみんな大切な愛しい仲間です。

なんとなく北斗七星から理屈・理論へ

川喜田二郎著　『発想法』　中公新書　　ｐ３５

…問題に関係のありそうな情報を集めるときに，最初に働く人間の能力は決して理性ではない。なんとなくその情報が必要な気がするという感情のようなものが，理性よりも遥かに先を進んで探索活動をしているのである。それよりもずっと遅れて，「確かにこの情報は問題に関係あると思う」という理性的な判断が，そのあとに従ってくる。さらにその理性的な判断の中でも，「どういう意味で，この情報は問題に関係あるのか」という理屈は，もう一歩遅れてやってくるのである。…

この件を読んでいて，私が考え，命名した「北斗七星のシステム」を想い出しました。

勝つ試合をするには，攻守共に**数的優位を保ち**，ハイプレスのサッカーを展開し，相手陣内でボールを囲む４人：トップ・ＳＨ・CH・ＳＢの**ｒｈｏｍｂｕｓローンバス(ひし形)**が必要。

ネガティブトランジション(攻めから守備への切り替え）に備えるための**つるべ**（ＣＢが相手トップをマーク：予防マーキングして，その斜め後ろにボールと逆サイドのＳＢが位置して，中央のゾーンをカバー：予防カバーリングする守備の備え)。

ボールと逆サイドのＭＦは同サイドの相手ＭＦをマークしながら，サイドチェンジのボールを受けるポジションをとり，**位置的優位を確保**して，ボールを受けたら相手ＤＦを抜き去りシュートする，クロスを入れる狙いを持つ。

※ここで１対１の強さ，**個々の質的優位**が問われます。

俯瞰をすれば「北斗七星」の形にフィールドプレイヤー７人が位置するシステムになるのです。６０年にいたる自身のサッカー人生の中で，勝つためには，何となく「北斗七星」が良い，と発想したのです。

味スタや横浜スタジアムなどでＪの試合，ヨーロッパのトッププロの試合を観る中で，４年生以上の試合にこのシステム採用してもらう中で，山本昌邦氏が解説する試合に学ぶ中で，このシステムは勝利につながるシステムだと理性的に判断できるようになりました。

さらに，サッカーに関する著作に学ぶ中で

「このシステムは理屈・理論としても成り立つのだ」

と確信したのです。

決め手となったサッカーの著作は何度も読み返している

レナート・バルディｗｉｔｈ片野道郎著

『モダンサッカーの教科書』

……イタリア新世代コーチが教える未来のサッカー……

ｐ３６～３７　ｐ２２９　　株式会社　ソル・メディア

昨年に刊行された書籍で，指導者として一読の価値ありです。

どなたかに『サッカーはひし形』（書名は定かではない）という本を１０年ほど前（横山二小に講師として勤めていたころ）にお貸したままです。どなたでしたっけ？